

県道の整備

県道41号線＝五日市筒賀線は、国道2号線の海老橋から三筋川に沿い、岡の下橋から三和橋に至る路線で、南部は近世の沼田郡往来を、北部は都志見往来を踏襲しています。

県道71号線＝広島湯来線は、国道2号線西広島バイパス田方ランプから、五月が丘～山陽自動車道五日市インターチェンジに至り、近世浜田への石州往来を踏襲しています。

県道290号線＝原田五日市線は、国道2号線中央陸橋からコイン通りを抜け、落合橋から郡橋を経て石内原田へ至る旧道と、石内バイパスを通る新道があります。中央陸橋の架設前は吉見園から八幡川に沿って落合橋に至り、近世の都志見往来と沼田郡往来を踏襲していました。

山陽本線

1897年(明治30年)に山陽鉄道の広島～徳山間が開設され、1899年(同32年)に五日市駅が現在地に開設されました。1906年(同39年)には県内全線の複線化が完了し、後に日本国有鉄道の所有となり、1964年(昭和39年)には県内全線の電化が完了して蒸気機関車の姿が消えました。その後JR西日本の経営となり、五日市駅は広島市西部の主要駅となりました。



五日市駅

広島宮島線

1922年(大正11年)に、広島瓦斯電気軌道が広島軽便鉄道から譲渡され己斐～草津間が開業しました。1925年(同14年)に草津～地御前間が、1931年(昭和6年)に宮島～現宮島口間が完成しました。1942年(同17年)には広島電鉄が分離独立し、市内線・宮島線・バス部門の営業を開始しました。当初五日市と岡の浜の2駅が置かれ、戦後に岡の浜駅が徐々に園駅となり遊園地を結び、八幡橋北に鈴峯女子大前駅も開設されました。合併にともない、佐伯区役所前駅が新設され五日市駅も移設されました。



昭和20年代の佐伯園駅

八幡川と開発

八幡川
歴史探訪
ガイドブック

八幡川の付替え

室町時代末期に八幡川は、落合で支流の石内川を併せ、竹之内で南に流れ古川を下って広島湾岸に至っていました。当時皆賀地区は「水長村」と呼ばれ、水害が起ると永らく水が抜けませんでした。江戸時代初頭に水長村と五日市村の境に位置する、竹之内東部丘陵鞍部(現在の泉橋～皆賀橋間)を切り通し、古川筋から現在の流路に付替えたのです。やがて下流一帯の水禍や干ばつなどが治まり、村名も皆が喜ぶ「皆賀」と改名されたと伝えられています。付替えられた地点には皆賀八幡神社が創建され、皆賀川下流は八幡川本流となりました。

五日市用水路

五日市村の人たちは広大な水田の開発に、毎年の水不足や洪水などのために八幡地区から、かんがいのため用水路の土木工事を開始しました。八幡川上流の寺田村に井堰を開設し、利松・中須賀・寺地・保井田・皆賀の各村の土地を借受け、1651年(慶安4年)に「五日市溝」(通称:五日市用水路)を敷設しました。五日市村北端の城山東の笛巻まで引水し保井田川を渡り、長林地で古川西筋と古川東筋が分かれ、宮ノ下で八反田筋と八幡川土手筋が、付替え地点東の馬場でひょうたん樋筋・横竹筋・蟹原末新開筋に分かれました。



五日市用水井堰



五日市用水路

八幡川の舟運

『五日市町誌・中巻』収録の古老談では、「八幡川の水量も現在より多く、川幅も現在の半分位で川舟を二、三艘以上も数珠つなぎにして、川土手を引っぱって上がっていた。」とされています。荷物は干鰯と蒲刈島や広村の小坪産の農業用石灰が主で、五日市港にて帆船から積替えられていました。八幡川舟運は郡橋まで通り薪炭・木材・米俵などが積み出され、舟溜りには石灰商・雑貨屋・薬屋などがあり、飛脚便にも使われました。北の川板には材木屋と薪炭商や割木商があり、河内や石内方面の集散地でもありました。1904年(明治37年)に県道が新設され、併せて周辺の道路整備も行われ、1919年(大正8年)頃から影を消して行き、馬車や自動車によって南北の交通は継続されました。

平野の拡大と地名の由来

八幡の地域史 B.C.200年代の弥生時代には、海拔20m付近に海岸線がありました。石内地区の湯戸には「百石」があり、飛石を伝って往来をしていたようです。それより上部の丘陵部には、縄文時代からの遺跡が多数存在し、日当たりが良く人の生活に適していたようです。900年前の平安時代末期に至って、現在の国道2号線西広島バイパス付近に後退し、波出石・木船などの地名が発生しました。しばらくして八幡地区の平地が誕生し、利松・寺田・寺地・中須賀・口和田・高井・保井田の諸村の輪郭ができました。利松～保井田間には古代山陽道が通り、利松には佐伯郡家と大町駅家が所在し、保井田正楽寺や中須賀田中寺などが創建されました。浄安寺・山入寺・慶雲寺などの廃寺も、寺田・寺地の地名の起源となりました。口和田は湯来和田村の口から、高井は高所の井手の意を表わし、中須賀は八幡川と石内川に挟まれた地です。保井田村や利松村は中世の文書に現れています。保井田は藤井田とも称し三宅田所氏に関係し、古代条里遺構の井桁状の水田に稲穂が穂り、利松から石内に至る古代山陽道に沿いその遺構が連続しています。



百石



五日市の誕生 室町時代に摂津国池田荘から入部し、池田城山に居館を構えた池田氏は池田池の改修やさらに南に開墾地を拡大しました。また高田郡の武将矢戸氏は、殿山と海老尾峰＝海老山の間に館を構え畿島合戦に備えました。付近の温泉にちなみ湯蓋新開もできあがり、五日市の市町と港町が登場しました。古川沿いの湯地区は舟上げにちなんだもので木船に通じていました。殿山の南には五つ神社があり五日市の地名起源ともなり、それから北の丘陵部は新宮山と呼ばれ瀬野新宮社がありました。西丘陵の先端には中世に五日市城が所在しふもとには若宮神社があり、中世末期の海岸線は旧市街南にありました。江戸時代初期に至り八幡川の付替えや五日市用水路の敷設が行われ、広島藩により南端に海老塩浜が開設され、港と塩浜の鎮守として塩屋神社が勧請されました。そのころに西国街道が沖土手を通り街道松が植えられ、川筋には八幡橋や三筋橋が架けられました。



昭和初期・西国街道の松並木

五日市の発展 江戸時代には五日市旧市街地は、光輝寺・品正寺・最広寺・正向寺などの浄土真宗寺院が建ち並び、門前町の佇まいを見せる市町と、八幡川をひかえた港町を併せ発展しました。殿山東部には東田や末新開や沖新開などが拓かれ、海老山は完全に陸続きになりました。八反田筋の



開墾記念碑

瀬戸の川や五日市港にも商家が建ち、西国街道沿いの草津や廿日市に比肩する街並ができたのです。明治時代に入ると市街地中心に村役場が開設され、国道の設置や山陽鉄道＝後の国鉄の開通で発展しました。南部港湾には海水浴場や浴場付きの交遊館が完成しました。やがて旭園・吉見園・藤垂園・

小己斐新開などが拓かれ、海浜地帯はベッドタウン化しました。大正時代に広電宮島線の開通で、三筋川河口部の美の里地区に商店ができ、昭和に入り楽々園が開設され西の中心になりました。戦後は海水浴場と遊園地は観光を浴び、大蔵省造幣局広島支局の開通で、通称産業道路＝コイン通りが完成し、五日市地区は益々商業地域として整備されました。

地域社会の構造変化

1872年(明治5年)	1889年(明治22年)	1955年(昭和30年)	1985年(昭和60年)
上河内村 下河内村 上小深川村 下小深川村	河内村(4大字)		
石内村	石内村(1大字)		
利松村 保井田村 口和田村 高井村 寺田村 中須賀村 寺地村	八幡村(6大字) 中須賀村と寺地村が 合併大字中須賀	五日市町 (20大字) 昭和33年一部 廿日市町	広島市佐伯区 ↓ 昭和58年境界変更 ↓ 住所表示変更
皆賀村 五日市村 海老塩浜村	五海市村(3大字) 明治44年五日市村		
倉重村 千同村 坪井村 三宅村 羅代村 佐方村	龍宮村(6大字)		

参考文献 広島県五日市町:『五日市町誌』全3巻

八幡川の利用 「五日市町誌・中巻」では、「不思議にもこの附近に住める白魚は、他のそれに比して風味一段とよく、背に美しき三ツ巴の模様あり、人々呼んで八幡神社の神の使なりと言う」と伝えています。また『都志見往来諸勝図』の寺田図には、川坂付近に川鮎の巣が描かれています。八幡村中須賀の胡粉工場では、1814年(文化11年)から1935年(昭和10年)頃まで、内海のカキ殻を水車の石臼で挽き砕いていました。



寺田図より

八幡川の史跡

廣・八幡川
歴史巡訪
ガイドブック

名 勝

海老山(カイロウヤマ) 広島湾に向かって突き出ている小山で、山全体が松に覆われ海老の尾の形をしているところから、海老尾峰=海老山と呼ばれるようになりました。現在公園として整備され、花見シーズンには多くの人が訪れています。

津久根島(ツクネジマ) 五日市港から約3キロメートルの沖合に浮かぶ小さな島で、島全体が花崗岩で形成され一面に松が茂っていました。この島は伝説の「あまんじく」の島として知られています。現在はカワウのねぐらになり、木々は枯れはてました。



天然記念物

神原のしだれ桜 石内地区の神原の「垂桜」(シダレザクラ)は、広島県には珍しい大木で、学術上貴重な存在となっています。樹幹周囲は根回り2.6mで高さは10mあり、樹齢は300年以上と推定されます。1973年(昭和48年)3月26日に県天然記念物に指定されました。

八幡川流域の城跡

徳美城跡 石内地区の湯戸にあり、長尾城跡の南西750メートル標高161メートルの山城跡で城主は不明です。

宮尾城跡 八幡地区の利松にあり、鴻尾ノ城とも言います。徳美城の山稜続きで、南方600メートルに位置します。山頂の標高は約85メートルで、三和中学校の裏手にあたります。源平合戦の時に源頼範に味方し、後に平家を打つため西国に下った利松孫右衛門の居城でした。



宮尾城跡

口和田土壘(ドルイ)跡 八幡地区の口和田と利松の境界にあたる山城跡で、標高は約253メートルで武田ヶ城と言います。口和田に土壘を設け俗に東城家と称します。城主は不詳ですが、大内氏の家人福井五郎所居と伝えられています。

鈴が峯城跡 八幡地区東方の高井と西区山田地区との境界にあり、口和田土壘跡の東方約800メートルに位置します。山城跡の標高は約207メートルです。

鬼が城跡 八幡地区東方の高井と西区古田地区との境界にあり、標高約282メートルの鬼ヶ城山の山頂に位置します。大模八郎の所居と伝えられています。

池田城跡 五日市地区の地毛と八幡地区の保井田の境に位置し、標高30メートルほどの山頂にあり、「城山」(ジョウヤマ)と呼ばれています。約660年ほど前に足利氏と関係した摂津国から、池田教依が当地に赴き池田城を築きました。池田屋敷や蔵谷などの地名も残り、八幡川下流域の開発にも乗り出しました。ふもとには五葉院跡があり、後には五日市光禪寺となりました。



池田城跡

光明寺城跡 五日市地区の亀山にあり、五日市城および幸崎城とも言われています。標高は約20メートルたらずの小山で、穴戸弥七郎元統の居城です。

石内地区の山城跡 古代山陽道の通った石内川を挟む丘陵には、歴史的にも重要な山城跡が多く分布しています。源平争乱後に交通の要衝として、当時の面影をとどめます。水晶ヶ城跡・串山城跡・今市城跡・長尾城跡・高城跡・京良木城跡・釈迦嶽城跡(大茶臼山)などがあります。

八幡川流域の神社

[石内地区の神社]

白山八幡神社 783年(延暦2年)豊前国の宇佐八幡宮から勧請したことに始まるといわれています。源平合戦に際し源範頼が戦勝を祈願し、戦国時代に大内氏家臣で水晶ヶ城主麻生右衛門が当神社を信仰し社殿を造営し、厳島合戦の際には毛利軍も戦勝を祈願しました。その後広島城主の毛利輝元も当社を信仰し、再度社領を寄進したといわれます。1908年(明治41年)に村内各地の神社を合祀し、1940年(昭和15年)に紀元2600年記念事業として境内が拡張され、現在の荘厳な氏神社となりました。



白山八幡神社

貴船神社 1885年(明治18年)に白山八幡神社に合祀されました。むかし神武天皇がこの地に上陸しました。御手ずから櫛の枝を折って地に立て、天神地祇に戦勝の祈願を奉げたという故事により、後年に里人はその地に注連縄をめぐらし、祠を建て御船船を記念して貴船神社と称したといえます。

[八幡地区の神社]

八幡神社 1908年(明治41年)一村一社の趣旨に沿って、村内の各神社の合祀を進めました。1915年(大正4年)に計8社を合祀する大正神社となり、1928年(昭和3年)に残る一社を合祀して、八幡村の氏神社の八幡神社となりました。現在は本殿と蔵殿が建ち、境内のイチョウは知られています。

合祀された神社1908年(明治41年)～1915年(大正4年)

中地:稻生神社
利松:新宮神社・古保利神社
寺田:寶神社
保井田:大蔵神社(境内社:庵(カマド)神社)
高井:稻荷神社
口和田:大蔵神社
中地:八幡神社=1928年(昭和3年)合祀



八幡神社